月刊 Acanthus
（土浦一高・土浦中学とその周辺の物語）
第１４０号　2020（令和２）年 12 月８日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰ　http:www.sin-syu.jp/

演劇部の仲間たちと。右端が顧問の稲吉一雄先生。
俵を高く持ち上げているのが３年生・貝塚勇さん

私の履歴書２

1944（昭和 19）年、中国のハルビン（哈爾濱）でお生まれになった定 13 回貝塚勇さんは、1953（昭和 28）年に中国から帰国し、1960（昭和 35）年、土浦一高定時制に入学されました。今号では、定時制時代から現在までの足跡を綴っていただきました。

帰国・編入・転校

1953（昭和28）年、文字どおりの着の身着のままで、中国から帰国した一家は、当初、麻生町（現行方市）に借家住まいをし、私は、麻生小学校３年生に編入されました。翌年、私たちは土浦市中村町大房にあった引き揚げ者用住宅に引っ越し、私は、当時、土浦三中と並んで建っていた中村小学校に通うことになりました。父は単身赴任し、母も働きに出ていましたので、弟たちの面倒は私が見ていました。中学生（土浦三中）になると、自分の学費を稼ぐために、新聞や牛乳の配達を始め、兎も飼育して業者に売りました（業者が引き取りに来ていた。）。全日制の高校に進学したかったのですが、家計を考え、土浦一高の定時制を選びました。

土浦一高定時制

1960（昭和35）年、土浦一高定時制に入学すると同時に、土浦三中の先生の紹介で、昼間は荒川沖小学校の臨時の事務職員として勤務することになりました。戦前で言えば「給仕」で、雑用係です。中でも印刷業務は、全て私に任されました。試験前ともなると、試験問題の印刷に追われます。生徒数が多かったので、1日に1000枚以上も刷る時があります。今は印刷機が自動で印刷してくれますが、当時は手刷りの謄写版（ガリ版）で、1000枚ともなると大変な作業です。謄写版には、絹製のスクリーンを張った木枠が刷り台にヒンジ（バネ付き蝶番（ちょうつがい））で取り付けられています。印刷を行うには、先ず木枠を持ち上げ、スクリーンの刷り台側にロウ原紙をローラーのインクで付着させます。藁半紙などの用紙をセットしたら、木枠を下ろし、それに接するように左手で木枠を下ろし、インクを付けたローラーを右手で握り、スクリーン上を移動させると、インクが原紙の孔を透過して印刷されます。右手のローラーをインク台の上に置き、左手で木枠を撥ね上げ、印刷が済んだ用紙を右手で捲る、この繰り返しです。左右の腕が違う動きを同時にしなければなりませんので、作業効率はなかなか上がりませんでしたが、苦労しているうちに、学校の誰にも負けない速さで印刷できるようになりました。

荒川沖小学校教職員（1960（昭和 35）年４月）。最後列右から５人目が貝塚勇さん

荒川沖小には、土浦一高卒の先生が3～4名いらっしゃって、可愛がっていただきました。遠足に連れて行ってもらった時には、私が被っていた学帽を先生が被って、得意気になっていたのを今でも覚えています。桜水の徽章の付いた帽子が懐かしかったのでしょう。休日には宿直室に呼んでくれました。当時は、先生方が交代で宿直勤務に当たっていました。飲み物やお菓子が用意してあり、いろいろな話をしてくれました。一緒に泊まらせてもらい、語り明かしたこともありました。

荒川沖小でのその日の勤務が終わると、自転車で登校しました。当時の６号国道はまだ砂利道で、永国の坂を登るのは一苦労でした。通学途上、浄真寺前でトラックに引っ掛けられ、右手を怪我する事故にも遭いました。そのため、右手の人差し指は、今でも真っ直ぐには伸びません。

カメラに興味があったので、４年生になったのを機に、現像や焼き付け、引き伸ばしの腕を磨きたく、土浦警察署前のイガラシカメラ店に転職しました。暇な時には暗室に籠もって、写真技術の習得に励んでいました。フィルムの現像、焼き付け・引き伸ばしは、写真技師の腕一つで仕上がりが全く違ってきます。腕を上げると、贔屓のお客さんも付くようになりました。

演劇部

入学して程なく、草苅宏明先輩（定10回）に誘われて、演劇部に入りました。顧問は稲吉一雄先生です。演劇に興味があったのが第一ですが、人前で話すのが苦手でしたので、それを克服するためでもありました。

演劇部では、秋の文化祭公演に向けて、1年間、稽古が続きました。４年生の時には、木下順二作の『夕鶴』を上演しました。毎年違う演目を上演することにしていたので、舞台装置などは全てを作り直さなければなりません。脚本は、私が文化祭用に書き直しました。部員は、午後９時に授業が終わるとそのあと遅くまで、そして日曜日にも登校して、練習をし、舞台装置や衣装作りにも時間を遣り繰りしました。公演当日、旧講堂は観客でいっぱいでした。私は、「与ひょう」役を演じました。「つう」役は、３年生の緒方（旧姓大橋）恵子さん。その熱演に観客の殆どが涙を流していました。公演は大成功。カーテンコールで貰った拍手は、今も耳に残っています。舞台を支えてくれた仲間の有り難さも忘れられません。今も舞台に立っていますが、その度に『夕鶴』の感激が蘇ります。

レインボー写真店

写真と演劇の勉強がしたくて、日大芸術学部への進学も考えましたが、家のことを思い、1964（昭和39）年3月に卒業し、そのままイガラシカメラ店に勤めました。が、贔屓客の勧めもあり、独立を決意し、翌年9月、東崎町に「レインボー写真店」を開きました。DPE（現像・焼き付け・引き延ばし）だけでは食っていけませんので、免許証用写真や商業写真、出張しての婚礼写真の撮影などもやっていました。当時は、近所の神社で結婚式を挙げ、披露宴を自宅で催す家が多かったので、撮影に呼ばれることもしばしばで、中には披露宴に席を設けておいてくれるお客さんもありました。大変有り難かったのですが、私は酒は飲めませんし、長時間宴席に付き合っている暇もありませんでしたので、ご馳走を頂戴すると、早々に引き揚げました。

写真の腕を上げたお客さんは、プロのモデルさんを撮りたくなるようです。撮影会についてのリクエストがあり、モデルさんを呼んで開催しました。そうすると、「ヌードモデルも呼んでくれ。」という声も掛かります。お客さんの要望ですので、断るわけにもいかず、モデルさんを手配し、撮影会を始めると、どう情報が伝わるのか、知らない顔も交じっています。そういう人に限って、カメラを持っていません。撮影会終了後、モデルさんから「ファインダー越しに覗かれるのは、何とも思わないけど、カメラを持ってない人に見られるのは恥ずかしいから止めて下さい。」と苦情を言われました。

常連客も付き、何とか続けていましたが、2度のオイルショックに見舞われたことと将来はデジタルカメラが主流になるのだろうとの考えもあったので、1976（昭和51）年8月に店を閉めました。

セントラル科学

セントラル科学（株）は、従兄の貝塚俊雄（高7回）が起業した、水や大気の汚染度を測定する器機を製造する会社で、1967（昭和42）年の創業以来、誰にでも、迅速、簡単、高精度に測れる測定器の開発と普及とに努めてきました。

当時、公害問題、特に水質汚染は深刻になっていましたから、河川や湖沼での、生活排水・産業排水などの水質検査は欠かせません。従兄からの求めもあり、水質測定器や大気汚染測定器などの環境測定器一般を扱うセントラル科学は、将来に希望の持てる会社だとも思い、入社しました。

会社では営業・技術畑に関わり、官公庁・市役所・町村役場・大学・民間企業の水質検査室や公害担当部署を得意先とし、全国津々浦々を飛び回っていました。また、1977（昭和52）年に大阪営業所を、1981（昭和56）年に九州営業所を立ち上げ、1985（昭和60）年には茨城営業所開設に携わり、所長も拝命しました。茨城営業所では、筑波研究学園都市にある大学、国立や民間企業の研究所をはじめとする、日立製作所、日本原子力機構、動燃、鹿島臨海工業地帯の企業などを担当し、汚水処理には欠かせない、微生物が必要とする酸素を測るための溶存酸素計（DOメーター）・処理水の汚れを測定するCOD（化学的酸素要求量）計測器・BOD（生物化学的酸素要求量）計測器などを納めていました。個人的には新規取引先1000社を達成し、2003（平成15）年4月に退社するまで、全国にきれいな水を蘇らせようと頑張りました。

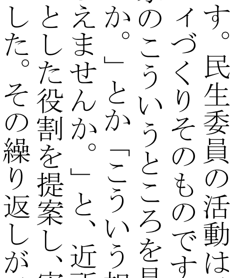
民生委員・「はつらつ一座」

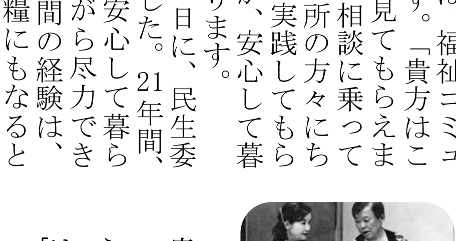
セントラル科学での営業経験を通じて、人と接することの喜びを実感するようになりました。そうした思いから、退職前でしたが、1998（平成10）年12月1日、民生委員・児童委員の委嘱を受けました。新任の頃には、「民生委員が来ると近所に格好が悪い。」と拒絶された苦い経験が何度かあり、訪問活動の難しさを痛感しました。しかし、民生委員・児童委員の活動の基本は、年間160日にも及ぶ家庭訪問です。訪問活動を重ねていくうちに住民も分かってくれるし、その住民が手助けをしてくれるようにもなります。民生委員の活動は、福祉コミュニティづくりそのものです。「貴方はこの家のこういうところを見てもらえませんか。」とか「こういう相談に乗ってもらえませんか。」と、近所の方々にちょっとした役割を提案し、実践してもらいました。その繰り返しが、安心して暮らせる地域づくりに繋がります。

21年間、民生委員の定年・75歳を迎えました。2019（令和元）年11月30日に、社会福祉の増進と誰もが安心して暮らせる街づくりにと微力ながら尽力できたと思っています。21年間の経験は、自分自身の向後の生活の糧にもなると思います。数々の経験を生かして、これからも、支え合い、助け合い、触れ合いのある社会福祉活動や安全で安心な街づくりに貢献していきたいと思っています。

セントラル科学退職後、民生委員としての活動を続ける傍ら、地域社会の活性化の手助けにと思い、演劇部活動の経験を生かして、シニア劇団「はつらつ一座」を立ち上げました。老人ホームなど高齢者福祉施設を利用なさっている方々を招待するなどして、各地で公演を続け、人と人との繋がりを深めて、14年目を迎えます。牛久市中央生涯学習センター2階の研修室で、公演に向けての稽古を毎月4～5回はして公演に備えています。コロナ禍で思うような稽古はできませんが、団員の皆さんと一緒にできる限りの努力を続けています。

演劇は総合芸術です。役者の陰には、素晴らしい舞台を創り上げようと情熱を注ぐ、衣装・音楽・照明・音響・舞台操作などの団員がいます。稽古では、先ず台本の読み合わせをし、本読み・立ち読みと続き、更に発声から感情の入れ方・間のとり方・声の高低などにまで、きめ細かな指導が入り、1つの芝居に仕上げていきます。見守ってくれている家族、励ましてくれる友人、劇場で拍手を贈ってくださる人たちなどなど、たくさんの方が力を貸してもくれます。皆さんからの声援を次のステップへの力に、今日も稽古に励んでいます。





「はつらつ一座」公演（牛久市中央生涯学習センター文化ホールで）

俳句・短歌・川柳

平成に入り、弟、父母、義父母を次々と亡くし、寂しく悲しい、虚ろな私を癒してくれたのは、俳句や短歌、川柳を詠むことでした。それは、日々の心を写す鏡となり、前向きに生きる術となりました。毎日を機嫌良く暮らすことが、弟や親たちへの供養だと思い、吟行と投句を続けています。拙いものでも世界でたった1つの作品ですから、地域のタウン誌に投稿するなどして楽しんでいます。

昨年の第20回常陸国・小野小町文芸賞の俳句の部に応募した「薪能黒々浮かぶ櫓門」では秀逸を、今年の短歌の部の「水戸っぽの武士の魂生きてゐて高校生の竹刀のひかり」では大賞を受賞できました。

（高21回　松井泰寿）